



校長室だより 10号

中 島 悟

【キャッチフレーズ】

未来に残そう 伝え築いた 振徳商業
目指せ 三種目 日本一 !

- 1 「突っ走った”緑の旋風”」 旧職員 長嶺哲哉 30周年記念誌より抜粋
- 2 出逢ったいい話 「鬼束さんの供養祭」 『致知』1998年10月号より抜粋

突っ走った“緑の旋風”(原文に一部追加修正) 旧職員 長 嶺 哲 哉

日南振徳商業高校創立30周年記念を心からお祝い申し上げます。

30年にわたる歴史とその足跡を集大成され、本記念誌が発刊されますことは、大変意義深く先生方のご苦勞に対し深く敬意を表したいと思います。

当時のことを回顧してみると思い出深く忘れられないことばかりで言葉には言い尽くせません。

想えば、あの初めての入学式の日、ペンキ塗りたての校舎、そしてつめかけた報道陣に緊張し、式の途中で、気分が悪くなり数名の者が倒れ、クラス担任は大変でした。また、新しい運動場は、今の新設校のようでなく、それは、それは大変なものでした。

山土地を埋めたてた石ころだらけで、おまけに水はけが悪く雨が降れば、膝まで埋ってしまうような状態でした。連日のように、先生も、生徒もいっしょになってクワやスコップで整地作業をしたものです。本当に当時の生徒達はよく頑張ったものです。

体育の授業といえば、大教室での体力づくりばかりでした。入学して2ヶ月足らずの5月末の県民体育大会(高校総体の前身で全国大会の県予選)に参加するために、初代校長の筒井憲二先生をはじめ、職員・生徒180名余りで、放課後、正門の前の坂道で行進の練習をしましたが、当日は生憎の雨で、中止になり、陸上部員4名(沖水・広田・高橋・鈴木)をつれて都城の会場に行きました。ところが急きょ開会式を行うということになり、毎日練習していた180名に変わり、私達5名は長靴に雨傘を持って行進したのです。その時のアナウンスが「日南振徳商業高校、団長筒井校長以下187名」と言われ、恥かしい思いと今に見ていろ、という思いを胸に歩いたのです。

11月に第1回体育大会を開催しましたが、演技中に突風が吹き、団席のテントの支柱が折れ、午後から中止になったのも今では、思い出のひとつになっています。

校内クラスマッチ・クラス対抗駅伝大会・長距離大会・強歩大会、そして秋の文化祭と、少人数の中で多くの行事を行ってきました。生徒達は「自分達で振徳商の伝統を作るのだ」と小じんまりした中でしたが活気があり気魂あふれるものでした。

創立3年目にして陸上部(河野敏史主将)が出場した、第1回県高校総合体育大会では、男女総合優勝を成し遂げ、緑のユニホームが県は勿論九州、全国に旋風を巻きおこしました。

その年西日本新聞に、『インターハイ突っ走った“緑の旋風”日南振徳商業陸上部、無名校が一躍九州No.1に!』と大きく出たものでした。

そしてそれから 数々の全国優勝と全国高校新記録を樹立し、ついに長野インターハイでは総合第3位、男子トラックの部で初優勝を成し遂げました。運動場の回りのヒマ

ラヤ杉は、当時の陸上部員や父母の方々が全国制覇をめざして植樹したものです。このようなすばらしい好成績を収めることが出来たのも学校は勿論、父母の方々の献身的なご協力と地域の方々のご協力があったからだと今でも感謝の気持ちでいっぱいです。

私は常々生徒達へ「言うは易し、行い難し、熱意、根気があっても実践がともなわなければなんにもならない」と言い続けてきました。宮崎～日南間を夜を徹して歩いたこと、日南高校時代、長距離選手を日南～宮崎間を走らせたことなど実践を通して根性などを養ってきました。退職しまして5年目ですが、これも振徳商業時代に身につけてきたお陰であると感謝しております。

これから益々学校が発展していくことをお祈りし、又陸上部の活躍を期待してやみません。

出逢ったいい話 「鬼塚さんの供養祭」： 南蔵院住職・林覚乗師のお話です。

長崎県の時津町に、打坂(うちざか)という急勾配の坂があります。そのバス停のそばに建てられている記念碑とお地蔵さんの前では、毎年慰霊の行事が執り行われています。

昭和24年のことです。地元長崎自動車のバスが乗客を乗せて、この坂を登っていました。坂の半ばに差しかかったとき、突然エンジンが故障し、バスは止まってしまいました。運転手はすぐにブレーキを踏んでエンジンを掛け直そうとしましたが、ブレーキが利かない。補助ブレーキも前進ギアも入りません。三重のトラブルが重なって、バスはズルズルと後退し始めたのです。

そのバスには、鬼塚道男さんという21歳の若い車掌が乗っていました。運転手は彼に大声で、「鬼塚、すぐ飛び降りろ。棒でも石でも何でもいい、車止めに放り込んでくれ!」と指示しました。鬼塚さんはすぐに外へ飛び出し、目につくものを車輪に向かって片っ端から投げ込みました。しかしバスは止まりません。乗車のほとんどは、原爆症の治療に通うお年寄りと子どもたちで、脱出はとても不可能です。その間にもバスのスピードは見る見る上がっていきます。坂の下は崖でした。ガードレールもなく、落ちればバスは大破します。崖まであと10m、5m……。全員が観念したところで、バスは奇跡的に止まりました。

我に返った運転手は、鬼塚さんがいないことに気づきます。まだ車止めになるものを探しているのかと思い、乗客と一緒に探し始めます。ふと、バスの後のほうを見て思わず息をのみました。そこには何と、後車輪に身を投げ、自ら車止めになっている鬼塚さんの無惨な姿があったのです。内臓破裂ですでに息を引き取っていました。

乗客は鬼塚さんを戸板で運びながら、「この方は仏さんか菩薩さんの生まれ変わりだ」と口々に言い、涙に暮れました。貧しい時代で何もしてあげることができず、また、鬼塚さんの死は、一部の人にしか語り伝えられなかったため、次第にその出来事は忘れ去れようとしていました。

24年後、乗客の証言にもとづいて、その事件が小さな新聞記事になりました。それをたまたま目にした長崎自動車の社長は、大変なショックを受けました。「こんな立派な社員がいたことを、われわれ役員が忘れてはいけない」そう考えた社長は、その日のうちに役員会を招集し会社で打坂のそばに記念碑とお地蔵さんを建てて供養することを決めました。鬼塚さんの供養祭は、いまでも続いています。